

生涯学習へつながるピアノ教育法 —現代のピアノ教育の問題点を中心に—

教科・領域教育学専攻
芸術系コース(音楽)
M10205A
西海 春香

1. 研究の動機と目的

ピアノ演奏において早期教育が重要である事はこれまでに成されてきた研究や実践から明らかである。その結果、幼くしてコンクールで賞を獲るなど優秀な成績を残し成長する子どもも珍しくないが、そういった子どもの多くが成長するとピアノ、音楽から簡単に離れていくケースが目立つ。これは、誰もがもっておくべきであるピアノを弾きたい、上手になりたい、弾いていて楽しいという音楽に対する純粋な気持ちが十分に育ってはおらず、コンクールに出場するという行為自体に目的がすり替わっているのではないだろうか。逆に、幼い頃から特別な教育を受けている、優れた技術をもっている、というわけではない子どもが大人になってからも、なにかしら音楽との触れ合いや演奏活動を続けていたりするケースもある。

筆者は子どもの頃、親にピアノを習わされているという感覚が強く、音楽を楽しむという気持ちをあまりもってはいなかった。しかし、音楽高校へ進学し恩師に出会ったことで音楽に対する気持ちやモチベーションが高まり現在も音楽を続けることが出来ている。この経験からピアノを学ぶ環境や指導者の影響は子どもにとって強く、重要な位置を占めて

いるのではないかと考えられる。子どもが音楽を好きになるか嫌いになるかにはさまざまな要因が考えられるが、成長し自ら判断が出来るようになった時に、音楽から離れるという選択をすることのない、子どもの頃から音楽に対する愛情を育てる教育をすることはとても大切である。そのためには弾くことばかりに専心せず、さまざまな教材を用いて音楽作品を多角的に捉え、自ら探求する姿勢を育む教育が必要であると筆者は考える。本論文では、生涯学習の観点から現代のピアノ教育に欠如する要因について分析、検討していく。

2. 論文構成

はじめに

第1章 生涯学習とは

第2章 現代のピアノ教育の実態調査

第1節 子どもの頃の音楽体験

第2節 音楽大学での現在の音楽活動

第3章 生涯学習へつながるピアノ教育の実際

第1節 指導の充実

第2節 多様な教材の選択

第3節 楽曲に対する多角的な理解を促す指導

第4章 指導法の提案

おわりに

3. 論文の概要

第1章では生涯教育の概念や歴史的背景を調べ、現在の生涯学習や生涯音楽学習が出来ていく社会の流れをみていった。そして、現在における生涯音楽学習の状況について調べた。

第2章では現在音楽大学に通っている大学生に子どもの頃の音楽活動、現在の音楽活動や将来の展望についてアンケートを取り現在のピアノ教育に欠けているものを調べて考察した。

第3章では第2章の結果を踏まえ、生涯学習へとつなげる指導に効果的であろう実践指導や教材に関すること、また多角的に音楽を捉えることについて考察した。

第4章では今までのことを踏まえ、クレメンティ「ソナチネ op.36-3」ショパン「子犬のワルツ op.64-1」ドビュッシー「子供の領分」からグラドス・アド・パルナツスム博士の3曲を例に挙げ具体的な指導案を作成、考察した。

4. まとめと今後の課題

生涯学習へとつながるピアノ教育法を要約すれば以下のようなになる。

子どもの頃の音楽体験や音楽大学での現在の活動について、アンケートによって実態調査を行い、音楽への接し方の現状と問題点について検証した。その結果、現在のピアノ教育に欠けているものは鑑賞への意欲や作品を多角的に捉えることに関する意識の低さ、また使用されてきた教材の幅の狭さなどであった。それらの要因がもとで音楽に対する愛情や自立性が育たず音楽を続けていくことが出来ないのではないかという結論に至った。

それを改善するためには、子どもの頃から音楽に対する好奇心や興味がもてるような作品に触れさせ、作品を多角的に捉える能力が徐々に身に付くように指導することが大切である。それが音楽への自主性や自立を促すことにつながると考え子どもに対して、より分かりやすいと思われる指導法の提案と検討を行った。

今後の課題はこれまで検討してきた内容について、筆者自身が音楽に対する真摯な気持ちを忘れずに実践を通して検証していくことだと考えている。

我々音楽専攻生は、個人レッスンという特別な形でひとりひとりに合った技術や表現力を高めるアドバイスを受けてきた。これは他の科目にはない特別な形態であり、これまで教わってきたことに対する恩恵を忘れず感謝しなければならないだろう。しかし、それだけに個人の教師が子どもひとりひとりに与える影響は大きいのである。惰性で行われるレッスンと、世の中の動きに敏感に日々進歩するレッスンとでは、子どもたちの音楽的成長は目にみえて違ったものになるだろう。

質の高い教育を受けた子どもたちが、やがて大人になり演奏家や教育者として、また聴衆、アマチュアとして学んだことを生活の中で享受し、出来れば少しずつでも社会に還元していく、そういう生涯学習の視点を、教える側も学ぶ側も共にもつことが大切であると考える。

主任指導教員 木下 千代